

野尻重雄先生を悼む

柿崎京一

今年に入ってから風邪気味で臥っておられると人づてに聞いていたが、それほど大事にいたるとは思ってもいなかった。二月一日、

先生がお亡くなりになったという報せをうけても信じられなかった。死因は心臓マヒということでしたが、漸く忙事から解放され、いよいよこれから、戦後の農村人口移動の研究をまとめられようとしていた矢先、あまりにも不意の訃報であった。

先生は、明治三〇年、京都府北桑田郡周山村（現京北町）の山村にお生まれになり、少年時代をここで過された。おだやかで、話し好きな、それでいて少し内気な先生のお人柄はこうして少年時代の生活環境の中ではぐくまれたのであろう。東京高等師範学校（生物学専攻）を御卒業後、一時、松山の師範学校で教鞭をとられたが、まもなく京都大学に御入学、橋本傳左衛門博士の下で農業経済学を学ばれた。米価に関する研究を卒業論文のテーマとなさったとお聞きした記憶がある。当時は農村凶慌の渦中で、学界においても農村問題に議論が沸騰しつつあった。そうしたとき、橋本一大概の系譜に示される濃厚且つ実証的な学風をもつ、いわゆる「京都学派」に学ばれたことは、先生の学問的関心や研究方法に強い影響があったこと、思われる。昭和五年、大学を卒業されると同時に、母校の東京高師の教官に迎えられ、農業経済学を担当されたが、その間に労作教育論など、農業農民教育に関する初期の業績を残された。当時先生は生物学教室に所属しておられたから、農業経済学関係の文献資料類は殆んどなく、その点では恵まれた研究条件ではなかった。その頃から農学教室を独立させることが先生の宿願となったようである。その御努力は、昭和一八年、理科四部（生物農業専攻）の新設に結実するのであるが、さらに戦後の学制改革の際、この学科を

基礎にして農学部の新設に御尽力なされ、農村経済学科に、農業政策、経営学とならんで農村社会学、農村教育学というユニークな講座を開設するまでに発展させることになった。こうした事情を公表することは、控え目な先生の御本意にそむくことになるかもしれない。けれども農村社会学を講座制として大学教育制度にとり入れたという画期的な事実は、村研会員の皆さんの御記憶に止めておいていただきたいと思います。

ところで、研究生活に入られた当時、先生が、ソロキン、ツインマン、ギャルピンのアメリカ農村社会学の学説、研究方法に強い関心をもたれていたことは、大著「農民離村の実証的研究」の序文にも、その一端をうかがうことができる。既にこの頃から農村調査の指導をとり入れられ、毎年夏、学生と共に農村に入れられていたのである。時代はやがて軍国主義の抬頭による準戦時体制に入り、軍需産業の拡大強化にともない、労働力の給源として農村がとりあげられ、学会においても農村人口論、農家労働力質労働化論、また人的資源論などの論議が高まりつつあった。たまたま、例年の夏期調査実習を山梨県下の山村で行った際、そこで村の青年がつきつきと都市へ移動していく現状を目撃され、そのことが直接のきっかけとなって、農民離村の研究と取組む決意をなされたということを知ることがある。かくて、農民離村の実証的研究は、昭和一二年より本格的に始められ、戦時中の困難な条件（一農村が戦力の重要な源泉に位置づけられるとともに、農村人口の把握は軍の機密事項として、その実態調査活動が制限されていく状況）のなかで、

一五年までの四か年間に、神奈川県高部屋村（調査戸数六一四）にはじまり、岩手県波民村（同四九三）にいたる、七県下、二〇か村（行政村）、統計一〇五八一戸を数える膨大な農家面接聴取資料にもとづいて、周密な分析を精力的に進められた。その成果は、農村労働移動調査第一報「農村労働流出の階級性」（農業と経済第五巻三号）と題して発表され、以後、ひきつゞき第一報まで一連の論文としてまとめられ、昭和一七年、前記の著書に集大成されたのである。

随所に重要な理論的仮説を提示されている本書の全貌をここで要約することは到底不可能であるが、第六編「移動に依る農家家族労働構成の変化と農業生産構造に及ぼす影響」は、私にとってもっとも興味深く示唆にとむ内容を多く含んでいるように思われる。この部分は、ソロイキンらアメリカ農村社会学の成果、チャヤノフの小農経済の理論を批判的に摂取し、日本の家族への修正適用をなされ、農民の移動現象を、(一)家族の大いさの決定要因として、(二)嫡系と傍系成員という家族員の地位・役割構造の差異に着目され、とくに「長子縁」との関連において、(三)農家質働化形態の進行、それにもなり農業生産構造、農家階層の分化に及ぼす影響という、社会的な分析視角から考察されておられる。こうした先生の学問は、戦後、農村人口問題研究のシリーズ（第一集は一九五一年刊）、村研年報第四集（一九五七年）、「農村の人口」（野尻編著、一九五九年）などにおける、中島、並木、林（茂）論文をはじめ若手研究者に継承され、農村人口の研究を発展させる基礎となっているのであ

って、その学問的意義は大きい。

「農民離村の実証的研究」は前述のように昭和一七年、岩波書店から発刊されたが、その学問的業績に対して、農学会賞、ひきつゞき農学博士の学位を授与されることになった。しかし、その後心身の極度の疲労から一時研究生生活を中断しなければならず、加えて戦災、疎開、敗戦、またその前後に御両親がお亡くなりになるなど先生にとって御苦悩の多い日々が重った。しかし、学問への強烈な情熱は、こうした衝撃を克服させ、昭和二二、三年頃から、再び農村調査に着手され、戦後の農村過剰人口、潜在失業人口の研究にご活躍なされ、多くの業績を示された。またその間、二五年には「農村人口問題研究会」の発足に中心的な役割を果たされ、二七年、「村落社会研究会」の発会時には年報委員（野尻・武田・福武）として参加されるなど学会活動に対する貢献も大きかった。

しかし、他方、戦後の学制改革、とりわけ農学部の新設や研究体制の整備などで、急に身辺御多忙となり、大学の評議員や農学部長に就任され、また定年と同時に京都学芸大学の学長に懇請され、二期学長をつとめるなど、年々の課題とされていた戦後の農村人口研究の完成は果されることができなかった。四〇年三月、学長退任後、ようやく忙事から解放され再び御研究に専念できるようになられたときに、先生が急逝されたことは何んとしても悔恨にたえない。

みの虫も巢ですこしづゝ動き居り

今年の年賀状に書き添えてくださった先生の俳句である。底冷えのする京都の冬の日、病床に伏しつゝも、なお学問への執着から

れ、じつとしておられないお氣持だったにちがいない。謹んで御冥
福を祈る。